(三)新たな飛躍を期して

創立二十五周年記念式典　昭和二十六年九月八日、サンフランシスコで、アメリカなど四十八の連合国と日本の間に、対日平和条約が調印された。これによって第二次世界大戦の戦後処理が完了し、わが国はふたたび独立国としての道を歩むことになったのである。

この昭和二十六年は、本校にとっても、まことに意義深い年であった。すなわち、大正十五年に岩手中学校が設立されてから、ちょうど四半世紀を経過した時期に当っていた。年度が始まるとともに、学校当局も石桜会も、ともに創立二十五周年を盛大に祝おうと、その準備にとりかかった。恒例の運動会や文化祭などは、すべて記念行事の一環として行なうことになり、さらに儀式として創立二十五周年記念式典を開催する計画が立てられた。

記念行事の幕あけは、十月二十三日、本校校庭で挙行された運動会であった。また十月二十六日から三十日まで校内体育大会が催され、いずれも盛会裏に終了した。

中心行事の創立二十五周年記念式典は、講和後初の文化の日である十一月三日に、当時東北一を誇っていた本校講堂で、おごそかにとり行なわれた。定刻の午前九時に開会となり、国歌斉唱ののち、つぎのような理事長式辞があった。

「本日ここに菊花薫る文化の日を期し、多数来賓各位のご来臨を仰ぎ、岩手高等学校ならびに岩手中学校創立二十五年記念式を挙行するに当り、所懐の一端を述ぶる機会を得ましたことは、私の最も光栄とするところであります。

顧みるに前理事長三田義正翁は、つとに教育報国の志をたて、国家興隆の基は実に人材の育成にあると痛感し、同志とはかり大正十五年財団法人岩手奨学会を組織し、岩手中学校を創立したのであります。

初代校長鈴木卓苗先生は、第一次欧州大戦後人心ようやく浮華軽佻に陥ろうとするとき、よく本校創立の主旨を体して質実剛健の校風作興を企図したのであります。次いで二代校長として栃内曽次郎先生を迎えましたが、惜しくも就任式の壇上にたおれられ、その雄大なる抱負経倫はついに実現を見ずに終ったことは、すこぶる遺憾とするところであります。

昭和八年現校長佐々木哲郎氏就任、爾来率先垂範教職員を統率、本校教育の使命達成に精進、ようやく今日の業績を見るに至ったのであります。終戦後学制改革により昭和二十二年新制中学校、翌三年高等学校を新設し、財団法人もまた本春学校法人岩手奨学会に移行したのであります。創立以来卒業生を送ること二千二百五十四名、あるいは上級学校に進学し、あるいは実社会に出で各方面に活躍、いささか社会に貢献しておりますことは、私の最も欣快とするところであります。これひとえに、歴代学校長を中心として、教職員協力一致生徒薫育に尽瘁せられました結果と、当局のご指導、ＰＴＡおよび各位のご後援の賜物でありまして、ここに深甚なる感謝の意を表する次第であります。今や講和条約の調印なり、文化日本再建の秋にあたりまして、自由と規律の本義にもとらず、独自の学風を顕揚して私学教育の精華を発揮したいと念願する次第であります。しかれども現在成績いまだ充分ならず、また設備においても欠くるところあるに鑑みまして、ここに創立二十五年を期し記念図書館の建設を企図し、もって将来の進展に備えますことを誓うものであります。教職員諸君ならびに生徒諸子、今日の記念式を機とし、さらに決意を新たにし、協心戮力本校創立の主旨を達成せられますことをねがう次第であります。いささか所感を述べて式辞といたします。

昭和二十六年十一月三日

式辞を読む三田理事長

永年勤続で表彰された教職員

学校法人岩手奨学会理事長
三　田　義　一」

このあと学校長の式辞があり、続いて永年勤続者の表彰が行なわれた。表彰されたのは、佐々木哲郎学校長、山中順三・小笠原哲治・戸嶋正夫・小林博の教職員、ならびに使丁の高橋清一・阿部新蔵の二名で、講堂は万雷の拍手でわきかえった。

さらに来賓祝辞ののち、生徒代表の八重樫昌宏も祝辞を述べ、午前十一時、祝賀式典は厳粛に、かつとどこおりなく終了した。当日、記念品としてガラス製定規が全員に配られた。

なお、十一月三日と四日の二日間にわたって文化祭が開かれ、各種の展覧会や、劇・音楽などが一般公開された。とくに音楽では、水原一作詞・生内義夫作曲になる「二十五年祝典カンタータ」が、グリークラブの合唱によって発表され、慶祝の雰囲気を大いにもり上げた。

石桜図書館の誕生　初代理事長の三田義正翁は、岩手中学校創立以前に、すでに図書館の建設計画を抱いていたという。そのため、用地として加賀野の川留稲荷付近を選定し、まず図書館長舎（故富田小一郎住宅）を建てたと伝えられる。この計画は一時中止され、翁は中学校創立計画のほうを実現されたわけである。

翁の悲願は、現理事長に引継がれた。すなわち三田義一理事長は、本校創立二十五年記念式典の席上、式辞の中で「ここに創立二十五年を期し記念図書館の建設を企図し、もって将来の進展に備えますことを誓うものであります」との所信を表

パンと牛乳の校内販売

校内でパン販売が始まったのは昭和二十五年十月で、肴町銀座マーケットの業者が出張したものである。一個十円で、パン券持参者には八円で売られた。牛乳は五円と十円の二種類であったが、五円牛乳に人気が集まった。当時、五円牛乳が日に四百、パンは三百ぐらい売れたという。業者の話では、他校よりも一割ほど売上げが多かったらしい。このパン販売はのちに生活委員会が担当し、昭和四十一年まで続けられた。

五日制始まる

戦後、日本社会のアメリカ化が各方面で見られたが、その一つにサマータイムがあった。夏の間だけ時間をいっせいに一時間繰上げ、明るい日中を有効に活用しようというもので、昭和二十三年五月から実施された。しかし、日本の実情に合わなかったため、長続きはしなかった。

これとよく似た経過をたどったのが、学校の授業の五日制である。課外活動を重視する新教育のありかたをさらに徹底させる目的で、土・日の二日間を休日にする試みが、各地の学校で行なわれた。本校でも昭和二十五年の五月から、一時五日制を採用している。この制度を生徒は歓迎したが、間もなく生活指導上問題があるという反対意見が父兄側から出た。学校側も協議の決果、二十六年三月を期して、五日制を廃止した。

開館以来蔵書数を誇る同書庫

記念事業として生まれた石桜図書館

明した。

この英断は、教職員や在校生はもちろん、卒業生にも、大きな喜びをもって迎えられた。なにしろ、それまでの図書室は合同教室の隣りの一室であり、収容人員や冊数が限られる関係から、内容の充実がむずかしかったからである。

いよいよ奉安殿跡の建設予定地で地鎮祭がとり行なわれたのは、昭和二十八年五月のことであった。以後着々と工事が進められ、鉄筋コンクリート二階建の建物が、しだいにその偉容を現わしていった。二百平方メートルあまりの一階に、閲覧室・書庫・特殊講義室などを設け、二階は書庫にあてるという設計であった。そして翌二十九年三月三十一日、建物本体がぶじ竣工した。

昭和二十九年度の新学期そうそう、それまで教務主任の職にあった山中教諭が、図書館長に任命された。また司書として、津志田教諭が迎えられた。以後この二人の努力と石桜会図書委員の協力によって、開館準備が進められる。何しろ本は湿気をきらうので、建物が完成したあと、しばらく乾燥期間をおく必要がある。そこでその間に内部の設備をととのえるとともに、図書館運営委員会や図書選定委員会など、組織面の検討を行なった。また図書室の本や、新規購入図書を、日本十進分類法にもとづいて分類整理した。

みんなが待ちに待った開館の日が、昭和二十九年九月十三日にやって来た。はじめて館内に入った生徒たちは、近代感覚のみなぎる構造・設備・書庫・カウンター、また豪華なベルギー製ガラスのはまったドア、ドイツ製の時計などに目を見はった。蔵書数は、四千冊あまりであった。一高校が、このように立派な独立図書館を持つ例は国内でもなかっただけに、だれもがその誕生に誇りを感じた。そして図書館の名称も、歴史的な経緯を考慮して、岩手中・高等学校図書館とせず、「石桜図書館」と命名された。

この石桜図書館の建設に要した費用は、建築費四百八十余万円、設備費百十余万円、計五百九十余万円であった。このうち、四百五十万円は理事長が寄付し、残りを奨学会と父兄が負担し、県からも助成金が出た。ほかに図書購入費として、年間百万円以上の予算が組まれたが、これは高校としては県下の最高額であった。

以来、年々図書の整備が進み、五年後の昭和三十四年になると、蔵書数は一万五千冊に達した。現在では、実に三万五千冊に充実されている。なお、三十四年度の新学期から、図書の館外貸出が始められたのであった。ときおり、利用者がかならずしも多くないとか、館内での態度に問題があるとかといった反省のもち上がることもあったけれども、今日まで、石桜図書館が果たし続けている役割は、まことに大きいものがある。

学園にとって、図書は貴重な財産である。さいわい、石桜図書館にはさまざまな分野の本がそろっているので、たいていの研究に不自由を感じない。教職員が積極的に活用しているのはいうまでもないが、大学に進んだ先輩たちも、卒業論文と取組む際などに、母校の図書館の豊富な蔵書の恩恵を受けている。今後も充実を重ねて、いっそうその存在価値を高めていくものと期待される。